

聖書:ルカの福音書20章20~26節

説教:神のものは神に返しなさい

はじめに

イエスが神殿の中で商売をしていた人たちを追い出すと、これを見て腹を立てた祭司長たちが「何の権威によってこのようなことをしているのか」と詰め寄ります。するとイエスは一つのたとえ話を語り始めます。ぶどう園の主人がしもべを遣わしたのに、農夫たちはひどいことをして何も持たせずに追い返してしまう。そこで主人は、自分の跡取り息子ならばひどいことはしないだろうと思って一人息子を送ってきた。ところが農夫たちは、ぶどう園を独り占めしようとしてこの息子も殺してしまった。そういう話でした。祭司長たちは、これは自分たちのことを言っているのだとわかり、ますます腹を立ててイエスを捕らえようとする。けれどもイエスに好意を寄せていた群衆たちの前では手が出せなかった。それが前回までのあらすじです。

そこで祭司長たちは次の手ということで、義人を装った回し者を送ってイエスを罠にかけようとした。それが今日の話になります。ここに出て来る25節の「カエサルのはカエサルに返しなさい」は、一般でもことわざとして使われるほど有名ですが、聖書本来の意味をきちんと理解しているわけではない。ではイエスは何を言おうとしていたのか。ともに考えてまいります。

1 誘惑

1) 甘いことばで

20,21節を読みます。「さて、機会を狙っていた彼らは、義人を装った回し者を遣わした。イエスのことばじりをとらえて、総督の支配と権威に引き渡すためであった。彼らはイエスにこう質問した。『先生。私たちは、あなたがお話しになること、お教えになることが正しく、またあなたが人を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。』」

義人を装った回し者ですから、「私たちはあなたを罠にかけるために来ました」とは絶対に言わない。心の中にある本心は隠しながら、その代わりに相手が気持ちよくなるような甘いことば、スイート・トークを語って油断させるわけです。考えてみるとエバを誘惑した蛇のやり口がまさにこれで、よく悪徳業者にひっかかって泣き寝入りしたという話を聞きますが、私は大丈夫と自信がある人

でもころりとやられてしまう。それほど強力な攻撃方法なのです。

2) 「分け隔てせず」

さてそんな彼らの言うことばですから、どこまでも巧妙です。たとえば、「あなたが分け隔てなく神の道を教えている。」つまりこうです。「あなたは人をえり好みをしなで、相手がだれであろうと同じことを教えます。」いっけんなにもおかしくない。でもよく考えると、どうしてわざわざこんなことを言うのか、どこか不自然です。どうも彼らは予防線を張っているのではないか。「あちらの人々によいことを語っているようだけれど、私たちの質問にも逃げないできちんと答えなさい。」

本心を隠して分け隔てして語っている人たちが、相手には「分け隔てするな」と要求する。彼らはばれないように義人を演じていたつもりだったのでしょうが、後ろに回れば尻尾が丸見えです。

3) 「カエサルに税金を納めることは」

そんな予防線を張っておいてから、彼らはこう質問する。「ところで、私たちがカエサルに税金を納めることは、律法にかなっているのでしょうか、いないのでしょうか。」

この質問のどこが罠なのか、少し説明が必要です。当時イスラエルはローマ帝国の支配下にありました。取税人という職業があったことからわかるようにローマ帝国は人々から税金を徴収し、ほとんど全部本国に送金されるのですから当然気持ちが良いわけがない。そうでなくても、自分の国が他の国に支配されているだけでも耐えられない屈辱です。多くの人たちは不満を感じている。そんな人たちの声を代表していたのが熱心党と呼ばれるグループです。彼らはローマ軍を追い出し自主独立の国家を取り戻す、そのためには暴力も辞さないという過激な反体制グループです。当然ローマ帝国に税金を納めることには反対という立場を取る。

いっぽう、これとはまったく反対の立場を取るもう一つ有力なグループもあった。当時イスラエルの政権を握っていたのがヘロデ大王でしたが、その支持するヘロデ党というグループです。日本でも天皇家を大切にす右派、保守派と呼ばれるグループがありますが、それとよく似ている。ヘロデ党はローマ軍と仲良くやりながら体制を維持していく

立場。ですから当然、税金は納めるべきと考えた。このようにイスラエルには、税金を納めるべきでないという立場と、納めるべきだと考える立場の二つグループが衝突していた。回し者はこの状況を利用して、イエスが納める、納めない、どちらと答えても反対側から文句が出てイエスの評判が悪くなる。そうなることを狙ったわけです。

2 罪を指摘することばとして

1) 玉虫色？

これに対してイエスはどう答えられたか。「『デナリ銀貨をわたしに見せなさい。だれの肖像と銘がありますか。』彼らは、『カエサルのです』と言った。すると、イエスは彼らに言われた。『では、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。』」

当時のデナリ銀貨の写真を週報に載せています。それを見ると、確かにカエサルの肖像とラテン語で「カエサル」と彫ってある。ということはデナリ銀貨はカエサルのものだという証拠。ならば、カエサルに返さなければならぬ。そこだけ見れば、ローマ帝国とうまくやっとうと考えていたヘロデ党の側に立ったことになる。

しかしイエスは「神のものは神に返しなさい」とも語っています。熱心党はイスラエルをローマ帝国から奪い返し、アブラハム以来の神の約束の地として取り戻すべきであると考えていますから、これは熱心党の側に立った答えとも受け取れる。なんだ、結局イエスはどちらの側からも攻撃されないように、いわゆる玉虫色の答えをして、それではあまりにも消極的すぎます。イエスはそのような方ではない。むしろ回し者たちの質問を利用して、もっと大切なことを教えようとしているのではないか。

2) 「納める」から「返す」へ

そこでもう一度、どんなやりとりがあったか見直していきます。回し者たちはこう質問した。「私たちがカエサルに税金を納めることは。」彼らの質問は「納めるのか、納めないのか」、そういう質問の仕方です。それに対してイエスの答えはこうでした。「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」「返しなさい」です。「納めるかどうか」と質問されたならふつうは、同じく「納める、納めない」で答えるはずですが、ところがイエスは、「納める、納めなさい」ではなく、「返しなさい」というふうに言葉を変えている。これ

は見落としてはいけない。イエスは全然違う次元の話をしているのではないか。つまり税金という目に見える次元のことでなく、目に見えない次元、すなわち霊的な世界をイエスをご覧になりながら語っているようなのです。

3) 祭司長たちの罪

①神のものを総督の権威に渡す

どういうことか。20節をもう一度読みます。

「イエスのことばじりをとらえて、総督の支配と権威に引き渡すためであった。」

彼らは、神の子であるイエスをローマ帝国総督の権威に引き渡そうとしていた。イエスは神の子ですから、もちろん神のもの。総督の支配と権威、これはカエサルのものです。それでこの二つをつなげれば、「神のものをカエサルに返す」ということになる。イエスのみことばに照らせば、これはあきらかに間違い。ところが祭司長たちはしていた、ということになります。

②神の宮を独占しイエスを追い出す

このことは、問題の発端となった神殿のことにもつながっていきます。祭司長たちは自分たちが神殿を管理する権威を独占して持っており、そんな権威を持っていないと考えたイエスを神殿から追い出そうとしました。これもイエスのことばに即して言い直せばこうなる。神殿はもちろん神のもので、そしてイエスは神のひとり子なのですから、ほんらい神殿はイエスに返さなければならぬ。ところが祭司長たちは頑なに神殿を自分たちのものにしようとした。つまり神のものを盗もうとした。こうして彼らの罪が明らかになるのです。

「カエサルのものは、カエサルに。神のものは神に返しなさい。」よく見るとこれは人間の罪を鋭く指摘する矢のようなことばだったのです。

3 恵みのことばとして

1) 返すべき神のものがあるのに

これを聞いて、ある方は言うかもしれません。

「私は祭司長たちと違う。神のものなんてなにも持っていない。私が持っているものは全部働いて手に入れたもの。だから神に返すものはなんかない。」

私はかつて、本当に自己中心的な生き方をしていました。自分の人生なんだから自分の思ったように歩いて行く。それでいろいろな人に迷惑をかけても。ところが、そんなことがいつまでも続くはずはなく、結局大きな問題が起きてどうにもなら

なくなり、それで教会に通うようになりました。
いま振り返れば、何が間違っていたかよく分かる。自分のいのちは自分のものだと思っていたけれど、実は神が与えてくださったものだったわけです。神のものなのに神に返していない。だから行き詰まってしまった。

2) 神のものを返せない自分であることを告白していく

かつてアダムとエバを誘惑した蛇はこんな甘い言葉を語りました。「あなたがたは決して死にません。それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪の知識を知るようになることを、神は知っているのです。」

これは、人間の罪は神に代わって自分が神のようになりたいというところから始まったことを教えています。ですから全部自分のものとしようとするわけです。

デナリ銀貨にはカエサルの肖像と銘が彫っていますから、どれをどこに返すのか、迷うことはありません。しかし、神のものについては目に見える所には肖像もなければ銘も彫っていない。なのでなおさらこれは自分のものだと勘違いしてしまう。でも霊の目で見ると、自分のいのちを始めあらゆるものに神の肖像と銘が彫られていて、それは神のものであった。それをお返ししなさいとイエスは言われる。返せなくて苦しんでいるのに、どうやって返せばいいのでしょうか。「私は神のものを返せない罪人です。」そう告白する時、実は私たちは神のものを神に返していくことになる。そのためにイエスが来てくださったのではないですか。「神のものは神に返しなさい。」イエスのことばは恵みのことばでもあったことに感謝します。